

【論 文】

研究・教育・学習の統合——事例研究

高 橋 直 彦

0. 摘 要

本論考では、英語を題材にして、研究と教育と学習の統合という（遠大な）トピックについて、（収集がつかなくなる程度に）可能な限り地に足のついた考察を行おうと思う。第1節では、一般に研究・教育・学習各領域に観察されたり領域横断的に観察されたりする認識上の誤りや勘違いについて何点か指摘をする。併せて、そうした観察に基づき、誤謬を払拭するためにはどのように考え何を実行すればよいか、という点について管見を述べる。第2節では、第1節で述べた問題解決の基本方針を（小規模ながら）具体例を援用しつつ例示することにする。

1. 問題の所在

1.1. 「習うより慣れよ」?

取材で、エベレスト山登頂を試みた理由を訊く NY タイムズ記者の質問：

NYT: Why did you want to climb Mount Everest?

どうしてエベレスト山に登ろうと思われたのですか。

登山家マロリーの返答：

Mallory: Because it's there.

そこに山があるからです。

有名なやり取りであるが、本論考をしたためている筆者の頭の中ではこれがいま便宜上一時的に次のように翻案されている。「なぜ文法に拘るのですか」「言葉には仕組み（＝文法）があるからです」。言葉に関し、研究・教育・学習いずれの活動を行うにせよ、文法を抜きにしたアプローチは言わば骨格を欠いた体躯のようなものである、というのが筆者の信念である。¹

¹ 一口に「文法」と言っても様々なものを想定し得るが、ここでは「英語母語話者の脳内文法を（母語話者・非母語話者が）記述した（規範文法でない）文法」を指す。従って、英語が外国語であり英

ただし、「木を見て森を見ず(細かいことに拘り過ぎて文法システム全体を見損なう)」であってもいけないし「森全体をぼんやりとただ眺めるだけで木々を見に行かない/山に登らない(文法を丁寧に考察しない)」のもよくない。(救助隊の二次災害等を考えると登山そのものに筆者は個人的には諸手を挙げて賛同できないが、ここは言わずもがな比喻とお考え頂きたい。)

さて、英語教師(あるいは一般に語学教育関係者と言ってもよいが)や学習者の間でさぶる人気のある、お定まりの合言葉に「習うより慣れよ」というのがある。とにかく至る所で目にするし、耳にする。これは、畢竟「文法など後回し!とにかく理屈抜きに慣れてしまおう!」との趣旨で使われるのが常態となっていると思われるモットーである。だが、筆者は当該モットーの掲げる主義主張(?)は基本的に無責任な路線であると考え、これには少なくとも以下の諸点を理由として挙げるができる。

- (1) a. 「後回し」と言っておきながら、待てど暮らせどまともな文法説明など結局は出てきた試しがない場合が大勢を占める。こういうのは「後回し」とは言わない。「詐称」と言う。まともな方略としては、まずは細部にこだわらない程度に文法システム全体を見ておき、二巡三巡するごとに文法説明の精度を上げてゆく、というやり方であろう。
- b. 最悪のケースとして、教師も学習者も共に「習うより慣れよ」に誘導され尽くして成り下がった場合。つまるところこれは「メダカの学校」であって「誰が生徒か先生か」分からない。となれば、そこに教師など果たして必要か。²
- c. 基本的な文法をきちんと教えようとするまともな教師がいたとしても、遺憾ながら相対的に少数派であって、片や「習うより慣れよ」に洗脳された学習者の顰蹙を買い、片や同様に洗脳された同僚に足を引っ張られる。
- d. それでも、真面目に勉強をしている一部の真摯な学習者が(淡い期待の下)なんらかの文法的説明を求めて食い下がるようなことが仮にあったとしよう。例えば、そ

語母語話者としての直感が働かない一般の日本人の無意識裡に侵す誤り等は(対照研究の題材にはなるが)ここで言う「英語文法」の対象には含めない。確かに近年世界中の Englishes を是とする考え方があり流行にさえなっているが、しかし第一に、そもそも「外国語話者の文法」までをこれに含めるとノイズが混入して収集がつかなくなるからである。第二に、地域方言や階級方言までも含めた世界中の Englishes を研究・教育・学習の対象とすることは実際問題として非現実的である。第二の点に関しては、翻って、日本人でさえ地域方言やスピーチレベルの変異まで含んだ Japanese を全て研究・教育・学習することが非現実的で、その必要もないという事実を鑑みれば、この点のご理解だけよう。(ただし上でも触れたように、日英対象分野の研究・教育・学習は一定の重要性をもつものであって、本論稿でも翻訳の問題との兼ね合いで一部取り上げることになる。)

² Leaders think and talk about solutions...followers think and talk about their problems. Brian Tracy
リーダーたる者は解決策を考え話題にする。追従者は目の前の問題点を考え話題にする。

れこそ「習うより慣れよ」の元とされる「Practice makes perfect.」(cf. (1e))に関して、なぜ「他動詞の筈の makes」の後に名詞でもない「形容詞 perfect」がきているのだろう、というような素朴だが鋭い疑問をもったとしよう。しかし習うより慣れよ式教師の口からは、新言語学（例えば構造言語学や生成文法や認知文法）の知見はおろか学校文法の片鱗さえもまともに出てこない、といったことが遺憾ながら往々にしてある。こうした場合、有り体に言うならば、文法に関わる鋭い質問で自分が答えられない可能性のある質問を予め回避するための自衛手段―即ち自尊心を保ちながらも質問をはぐらかすための常套手段―として「習うより云々」を謳うのでは、と勘ぐられても文句は言えない。（「Practice makes perfect.」の本項での正式な分析は後程提示する。）

- e. そもそも、「習うより慣れよ」は「Practice makes perfect.」の訳とされる (cf. (1d)) ものの、これが実は他でもなく誤訳なのである（後述）。（随分と昔に流行った戯れ言風に敢えて言うなら、まさに「ナンタルチア!」である。）
- f. 業界の都合という観点から言うならば、「習うより」の対極にある「文法重視」の質実剛健を謳う教材がまず売れないと達観した（一部の）業界関係者が、安直だが分かりやすいモットーである「習うより」を隠れ蓑として使いがちだというお家の事情があるといった点も挙げられよう。この点に関してはある程度理解はできるものの、しかし、これに教師までが相乗りして安直だが多数派たる学習者の受け狙いに身を窶すというのはお門違いであって、はるかに罪が重い。大学等で学生による授業評価を気にし過ぎて毅然とした態度を取れない迎合教師も同罪である。（テレビの視聴率を気にする連中とさして変わらない。どうせ論ずるなら視聴率でなく視聴質の良し悪しを論じたいものである。）
- g. もっと大きなメタレベルでのそもそも論に立ち帰って冷静に考えてみよう。英語が全員必修となつて（しまって）いる現状自体が大いに再考の余地ありなのであって、そのことを脇に置いて、小学生から大の大人まで「とにかくやらねばいけません。なにせお上のお達しですから (It's official!)」「やるに際しては、何も考えずにラジオ体操よろしく習うより慣れよで行きましょう」と言われて引きずり回される謂れなど、本来ない筈である。（現実を直視するなら、経済的にも安全上もまさに混沌とした現代社会では、例えばの話、簿記リテラシーや法律知識やらを一定程度学ぶことを全員必修にするといったことの方が、まだしも現実的である。平均的な日本人の場合、英語ができなくて死ぬことはないが、経済的な要因や法律上の理由で

死ぬことはあり得るからである。³ もっと極端な分かりやすい例で考えてみよう。母語話者並みの英語運用能力をもつがその英語力を生かして陰で戦争に加担するような活動をしている輩と、英語のEの字も分からぬが反戦活動に邁進している人と、どちらがまともかということである。)

- h. 筆者の本務校が有する学科である言語文化学科の場合も、実はこれに準ずる問題を引きずっている。如上の「言語」文化学科といった看板を掲げている以上何らかの言語を重視するのは当然であるにしても、言語のうちなぜか英語だけが全員必修となっているのが現状である。この点に関しては、しかし、(助成金の采配権を握る)文科省の「英語全員必修」という(本来高校までを対象にした—高校までも本来疑問ではあるが)方針以外には、確たる根拠は実質ない。⁴ 因みに、英語だけ全員必修となっている本学科の卒論のテーマとして最終的に英語を選択する学生の数は、結果的にほんの一握りである。学科の卒論のテーマ全体を眺めてみるならば、まさに良くも悪くも百花繚乱なのであって、一例を挙げるなら、かつて「おにぎり考」というタイトルの卒論さえあった。これに対しては、いや、テーマそのものが英語でなくとも、どんな分野だろうが本格的にやろうとすれば英語で書かれた文献は避けて通れない筈だ、といった反論もあり得よう。(そこまでのレベルに達した学生がどれほどいようか? という諦観の声を呑み込んだとして) しかしまさに、なればこそ、そうした場合を想定しそれに備えるのに、果たして「習うより」英語でいいのか? というのがここでの趣旨である。⁵

³ 例えば、「裁判とはそもそも誰を裁くものであるか?」という問に対し、「犯人」と答えるような能天気は論外として、「被告」と答えた御仁(大勢であろう)は英語以前に未だ近代デモクラシーの基本を理解していない勉強不足の輩である。お上のカモになって、いいように騙されるのはこういうタイプである。

⁴ ただ、東北学院大学はこれまで伝統的に世間から「英語の東北学院」という有り難い評価をされてきたし、学院側もそのことに自負と責任とを強く感じてきたことと思う。しかしながら少なくとも近年は、自他ともに認めてきたこの「英語の東北学院」という謳い文句自体の基盤が(学部学科による違いは当然あるにしても)遺憾ながら少々揺らいできているのではないかという査定を、現実のものとして客観的に誠実に認めねばならないものとも感じている。

⁵ 因みにもう一点。「日本の全大学の学長・総長にはゆくゆく英語圏の人物を据える。それが日本を国際化する最短・最善の道だ」と心底信じて疑わない一部文科省の(荒唐無稽な)本音を知っておいでの方が、果たしてどれだけいるか。こうした「国策」に関しては、遺憾ながら日本社会に根強く存在する同調圧力によって結局は屈することになるのも時間の問題ではなからうかと懸念する。いったい省庁も政府もどこを見て、何をやろうとしているのか皆目理解し難い国である。もちろん、省庁にも政府にもまともな方は多数おいでであろうが、結局は現場の実情を知らぬ御仁が主導をする構図がよくないのである。

話は逸れるが、何年も以前から、国際情勢に鑑み日本の年度始めを秋学期に移行可能か否かという問題が、それこそ複数の超有名大学も巻き込んで検討されてきているが、依然結論は出ていない。一番のデメリットは、導入時に、現行制度と秋学期制度との間の6ヶ月もの空白期間を受験生(高校生や浪人生)にも卒業生にも強いることになる、というものである。果たしてそうか。優秀な頭脳を寄せ集めてもその程度の垂直思考しかできぬか。水平思考で解決を見るではないか。なぜ「6ヶ月」という数字に囚われる。例えば毎年1ヶ月ずつづらせば、影響を最小限に抑えつつ6カ年でめでたく移

(1) に列挙した問題点を「研究と教育と学習の統合」という観点から簡単にまとめた上で、対処法を概括すれば以下ようになる。即ち、研究上も教育上も学習上も以下の点に留意した方がよい。

- (1') a. 文法を「後回し」にしない。説明の精度を上げつつ彫琢してゆく。
 b-d. 「習うより慣れよ」に与しない。
 e. 「習うより慣れよ」は「Practice makes perfect.」の誤訳である（後述）ことを知る。
 f. 業界の都合を優先しない。
 g. 多くの日本人にとって「たかが英語，全員必修は無用」である実情を悟る。
 h. 英語が重視される学部・学科であっても「英語全員必修」という縛りは再考すべきであることを認識する。

次に、(1e) で触れた「習うより慣れよ」は「Practice makes perfect.」の誤訳である、という点について述べる。⁶ この点は國弘正雄氏が機会あるごとに繰り返し主張している点である（國弘（1999）他）。その要点を述べるなら、「Practice makes perfect.」の本来の意味は、習う―則ちまずしっかりと考え、学ぶということ―は大前提です。これを大前提としつつ、さりながら、語学の場合はその基盤の上に練習もまた必要ですよ、それで初めて完璧になるのです、ということであって、「習うより慣れよ」などとは一言も言っていません、となる。

行可能であろう。しかも、1ヶ月遅れれば受験生・就活生にとっても心身に余裕が生まれるという余録さえついてくる。関与している垂直思考の根っこには物事を「一気に」遂行しようとする無意味な先入観が伏在している。しかし、何事もそうだが一気に変革しようすると結局はろくなことがない（脳の特性上もよろしくない）。「ゆとり教育」導入がいい例ではないか。ゆとり教育の失敗は、ゆとりそのものが悪かったのではない。徐々に様子を見ながら必要な軌道修正を施しつつ落とし所を考えてゆくりと、それこそ「ゆとり」をもって導入すればよかったのである。そして、一気に導入したツケとして（犠牲者たる）生徒・学生の急激な学力低下を招き、社会に出てゆかんとする卒業生の低学力に対する産業界の憂慮の念を惹起し、これに突き動かされた文科省が慌てて「一気に」採った道が「年間授業30時間を大学に課す」という責任逃れの出口対策である。早い話が（新たな犠牲者たる）大学は文科省の尻拭いをさせられているのである。「ゆとり」から「縛り」という洒落にもならない極端から極端への変節である。国家の一大事たる教育に対して文科省たるもの、思いつきと保身のみで動き、まるで定見がない。懲りない文科省は、例によって近年もやれアクティブラーニングがどうのとこれまた「一気に」導入しようとして躍起になっているが、いつまで経っても学ばない組織である。「学生目線でのシラバス記述」などに至っては噴飯もので、保育所の指導案（これこれの時期までに衣服の着脱ができる、等）みたい、という声さえ聞かれるのを当局はご存知か。因みに、「秋学期移行6カ年計画」のことを話したら、ある教員から「学院だけでやるのは無理でしょう」と言われてしまった。そんなことは当たり前である。本当に実行する気なら全国規模で、かつそれこそ大学だけでなく高校～保育園・幼稚園まで実行ということになる。さらに言うなら、国際情勢を云々する以上、日本同様に春学期制度を採っている他国の場合も足並みを揃えねば、意味がない。一もつとも、そのような国際化が果たして真に妥当か否かというメタレベルの問題は、依然要検討である。（なお、秋学期移行のもつ明らかなメリットを一点挙げるなら、受験時期が雪の季節と重なる地域の憂慮が解消される点である。―そもそも中央の人間にはこうした地域の大変さなどピンときていない。）

⁶ この文の構造に対する分析は第2節で正式に吟味検討する。

つまり、語学にとって「習う」(学習)と「慣れる」(練習)とは車の両輪の如きものであって、どちらか一方のみで成り立つものではない、という趣旨である。この点を汲んだ上で本稿で訳を練り直すとするならば、さし当り「学んで練習、鬼に金棒」とでもなろうか。

さて次に、この英文の構造について問題点を手短かに指摘しておこう(正式な解決策は第2節で論ずる)。上述((1d))のように、この文の分析は一筋縄では行かない。「makes」が基本的に他動詞と見做される以上「Practice makes perfect.」を「SVO」としたいところであるが、名詞類が入る筈の「O」の位置になぜか形容詞「perfect」が入っているからである。⁷ ざりとして「SVC」と考えてしまうと、今度は「C」の位置に形容詞が入れるのはいいとしても、他動詞「makes」がなぜ「O」でない「C」をとっているのか腑に落ちない、といったジレンマに遭遇するからである。さてどうするか。一つの選択肢は分析自体を放棄してしまうことである。則ち思考を停止して、この文をそれこそ「習うより慣れよ」式に「そういうものだ」と丸呑みするという選択肢である。⁸ これはしかし、(1b-d)に照らして排除される。次の選択肢は、誠実にまずは構造の分析を試みようとする行き方である。本論考では当然こちらの選択肢を追究することになるのであるが、詳細は第2節に譲ることにしよう。

1.2 テストが全て？

モンテネグロの首都は？

- (a) ブドバ
- (b) ジャコピツァ
- (c) テトボ
- (d) ポドゴリツァ

かつてネット上で筆者が実際に遭遇したクイズである。ごく一般的・平均的な日本人にとってこの問題はほとんどお手上げであろう。そもそも「モンテネグロ」って何？というレベルの方が大半であろう。「首都は？」と訊いている以上「モンテネグロ」はおそらく国名だろう、程度の予測にとどまる筈である。

この種の「四択問題」はしかし、英語の研究・教育・学習という本論考のテーマ、特にテストの弊害という論点にとって、実は極めて示唆的なものとなっている。

⁷ 「perfect」には「完了相」という意味の名詞もあるものの、この文の場合は当然場違いの解釈となる。

⁸ もちろんここでは「Practice makes perfect.」=「習うより慣れよ」と誤訳したままでいい、という意味ではない。

- (2) a. こうした四択問題が何らかの益（プレゼントや現金）に繋がる場合があるように、英語四択問題が何らかの益に繋がる場合がある（e.g. 単位の代わりとなる、昇進できる、海外勤務を命ぜられる）。
- b. 答えは四つの中にあるという（正しくないかもしれない）前提に立ってしまう。
- c. 制限時間内に解かねばならず、じっくり考えていると損をする。
- d. 選択肢の意味が分からなくとも、とにかく答えねばならない。
- e. まぐれだろうが当たればそれでよい、と考えてしまう。
- f. テクニック等を解く攻略本を浅く広く渉猟しておく方が有利とされる。
- g. きちんと解説する本や授業は、非実践的として回避されがちとなる。

いかがであろうか。雑学も英語も、今や世の中猫も杓子も「四択方式」に完全になびいており、あまつさえお上が先頭に立って音頭を取り舵取りをして、それに民衆が完璧に「誘導されている」世の中なのである。これが現実である。しかし、果たして本当にそれでいいのか。

(2) に列挙した問題点を「研究と教育と学習の統合」という観点から簡単にまとめた上で、対処法を概括的に示唆すれば以下ようになる。即ち、研究上も教育上も学習上も以下の点に留意した方がよい。

- (2') a. 言葉（の本質）を学ぶ真の「益」とは何だろう？ 人間にとって極めて大事な言葉というものがもつ真の意味は、単位や昇進や海外赴任等に還元可能な程度の単なる手段ではない筈である。
- b. 答えは絶えず四つの中にあるのか。例えば「首都は事実上ポドゴリツァとされているものの憲法上の首都はツェティニエである」といったきちんとした知識をもった人間ほど回答に迷う類のクイズは一体何を測ろうとしているのだろうか。英語の四択問題もこの手の不備を抱えたもので溢れ返っている。
- c. 時間に拘束されじっくり考えるほど損をする世の中は、拙速人間・いい加減人間を乱造し、最終的には衆愚政治に繋がる。逆に、時間を重視する割には試験結果が手元に届くまでのタイムラグが大きい。かつ、個々の問題のどこが当たって、なぜ正解かが示されないと、真の実力養成には繋がらない。
- d. 選択肢の意味が分からなくとも答えねばならないとは、どんな力を測ろうとしているのか？ そもそも、謳い文句に実践的な英語力試験とあっても、（話し言葉・書き言葉を問わず）現実の英語話者とのやり取りで「今から四つの選択肢を使って

話すけど/メールを書くけど正解の英語はどーれだ?」などと問うことなどまずない。通訳・翻訳ができた方がはるかに実践的である。

- e. まぐれ当たりでもよいなら、宝くじの英語話者、カジノの英語話者が大量生産される。幼稚園児 50 人を一堂に集め、TOEIC に類するフィンランド語試験をやれば 4 分の 1 の確率で正解する。これでフィンランド語がある程度分かっているとと言えるのか?
- f. テクニック本を涉猟するほど有利とは、英語力測定試験として情けない。おおよそその英語力しか測れない試験が高額で問題持ち帰りを許さないのも解せない。次回以降の試験に影響するというのが言い分だが、語るに落ちたとはこのこと。本当は受験生の英語力向上など望んでいないことの証し。受験生には顧客として何度も受けてもらいたいというのが本音。まさにビジネスである。関連業界・業種もおしなべてビジネスである。「みんなで儲けりゃ怖くない」
- g. きちんと解説する本や授業ほど忌避される。が、廃用性萎縮の法則は身体にも脳にも当てはまる。使わない身体機能が衰えるように、脳も使わねば確実に衰えてゆく。若いうちから使わなくなった脳は悲惨な結果へと繋がる。

「テスト」に関し、改めて虚心坦懐に考えてみよう。「四択」や「マークシート」は、受験生が大量の場合は必要悪として（あくまでも必要悪として）やむを得ない側面も確かにあるかもしれない。しかし、入学後の例えば少人数クラスでこれを行う意味は皆無である。アメリカの方がはるかに大きいからである。例えば「マークシート」などと言うと聞こえはいいが、これを試しに手動でやってみて頂きたい。そう、学生・生徒の答案を重ねて揃え、上から千枚通しで正解の記号を一気にブスリとやるのである……。しかも解答の数だけブスリブスリと。確かに 1 枚 1 枚採点するよりはるかに効率的である。効率的ではあるが、しかし合理的ではない。各人がどの箇所をどう間違ったのかがまるで分からないという意味で没個性的でもある。⁹ たくさん穴の開いた答案を仮に返却したりすれば、受け取った側は教師に非人間的な要素を感じ取るかもしれない。

テストの「平均点」や「偏差値」といった概念も、実は合理的ではない。かつて生前の無着成恭氏がラジオで次のような趣旨のことを述べたことがある。（筆者がまだ学生時分のことであり、だいぶ以前のことである。正式な日時や番組名は残念ながら記録も記憶もないが、それでも強く印象に残っている。）「学校では当たり前のように、国語算数理科社会のテスト

⁹ トータルの点数が一応分かる、という意味では外部試験と酷似。

の点数を合計して平均点を出しますよね。そしてそれを基に生徒を平気で序列づけする。でも、国語の点数と算数の点数と理科の点数を足して3で割った数字って、何か意味がありますかねえ。譬えて言うなら、身長と体重と胸囲を足して3で割った数字って、何か意味ありますか？ あははは…。目から鱗の発想・発言であった。さらには、「平均点」や（「平均点」に毛の生えたような）「偏差値」を云々するにしても、その基となるテストが例えば上述の「四択」だったとしたら、その欠陥をそのまま引きずっているのである。

問題は「四択問題」ととどまらない。「整序問題」「穴埋め問題」等、全て問題児である。(2'd)でも指摘したように、実践的な現実の場面で英語圏の話者と「整序問題」や「穴埋め問題」を活用した会話をしたことがある人がいたならば是非ともお目にかかりたいものである。「四択」「整序」「穴埋め」等々、いつまでもこうした付け焼き刃的な弥縫策を講じてばかりいるから一向に「研究と教育と学習の実が上がらない」のである。通訳力・翻訳力を磨く方がはるかに実践的現実的である。従って、テストもそういう実践的現実的な方向に沿ったものでなければ意味がない。¹⁰ 本論考では当然こちらの選択肢を追究することになるのであるが、詳細は第2節に譲ることにしよう。

1.3 日本語に訳すな？

「英語の長文を読んだ後、全体を和訳してみて、何を言っているのかピンとこなかったという経験はありませんか？ ありますよね。だから英語を和訳するのはやめましょう」

世の中には実際にこのような非論理的なことを平気で言う英語教師がいるのである。しかも、堂々とそれをシラバスにまで書く。まあ、自分で非論理的なことを言っているという自覚がないからこそ平気でこういうことを言ったり書いたりするのであろうが、それにしてもかかる教師に教わる学生もかわいそうなものである。仮に筆者が担当している学生の中にこんな発言をする者がいたら「馬鹿者！」と一喝しているところであるし、自分が学生時代にこの手の教師に教わっていたとしたら完全に反面教師にしていたであろう（幸いにしてここまでひどい教師には教わらなかったが）。「和訳してみて、何を言っているのかピンとこな」いのは、訳し方が下手くそだから and/or 英文解釈が間違っているからである。1文1文の英文をまずきちんと解析し、それをこなれた座りのいい日本語に当てていくなら、「全体を和訳してみて、何を言っているのかピンとこな」いなどということは絶対にないのである。ピンと

¹⁰ さらに言うなら、テストにばかりこだわっているからダメなのである。実際に自分の興味のもてる好きな領域で本を読んだり話したり書いたり聴いたりということをしないから力がつかないのである。本論考の最後に挙げた筆者の英文エッセイの例(6)-(9)を参照頂ければ幸いである。

こないのを和訳作業一般のせいになどしてはいけない。力のない自分のせいに他ならないのである。(原文自体が超難解な場合はまた別。だが、これは翻訳の問題とは別もの。)

藤田 (2015) が指摘するように、和訳禁止を金科玉条とする人は「That's a good question.」を「いい質問ですね」という意味だと生涯思い続ける可能性があるし、「maybe」を「多分」だと一生思い続け、「people」を「人々」だと死ぬまで思い続ける可能性がある。また、「I'm just a woman.」を「私はただの女」だとずーっと思い続け、「Let it go.」を「ありのまま」だと永久に思い続ける可能性がある。

筆者はかつて授業中に、ブルース・リー主演の「燃えよドラゴン」の原題「Enter the Dragon」の英語での意味を学生に問うたことがある。中でも一番振るっていた回答が「ドラゴンの中に入れ」であった。きっと動詞の原形「enter」で文が始まるので命令文だと思ったのであろう。しかし当方が「なるほど、「ドラゴンの中に入れ」か。でもそんなことしたらブルース・リーは「アタタタター」って言うんじゃないか」と返したら、クラス中が爆笑になった。「Enter the Dragon」の詳しい分析は第 2 節に譲ることにしよう。

「To be, or not to be; that is the question.」を紹介した後で、知る人ぞ知る「To be, to be; ten made to be.」を学生に訳させると、実に珍妙な回答が続出する。しかし、それでもみんながみんな懸命になんとか日本語に訳そうと頑張る。因みに、当言語文化学科のネイティブ 2 人にも訊いてみたことがあるが、2 人共「??????」であった。当然である。そしてさすがである。これは英語として「??????」となるのが当然の「文」なのだから。もうお気づきの読者、既に種明かしをご存知の読者もおいでであろうが、なんのこともさっぱり分からぬ御仁は、すぐにネットで調べたりせずに、とにかくまずはご自分で考えてみて頂きたい。

2. 問題解決の基本方針

2.1. 「学んで練習，鬼に金棒」

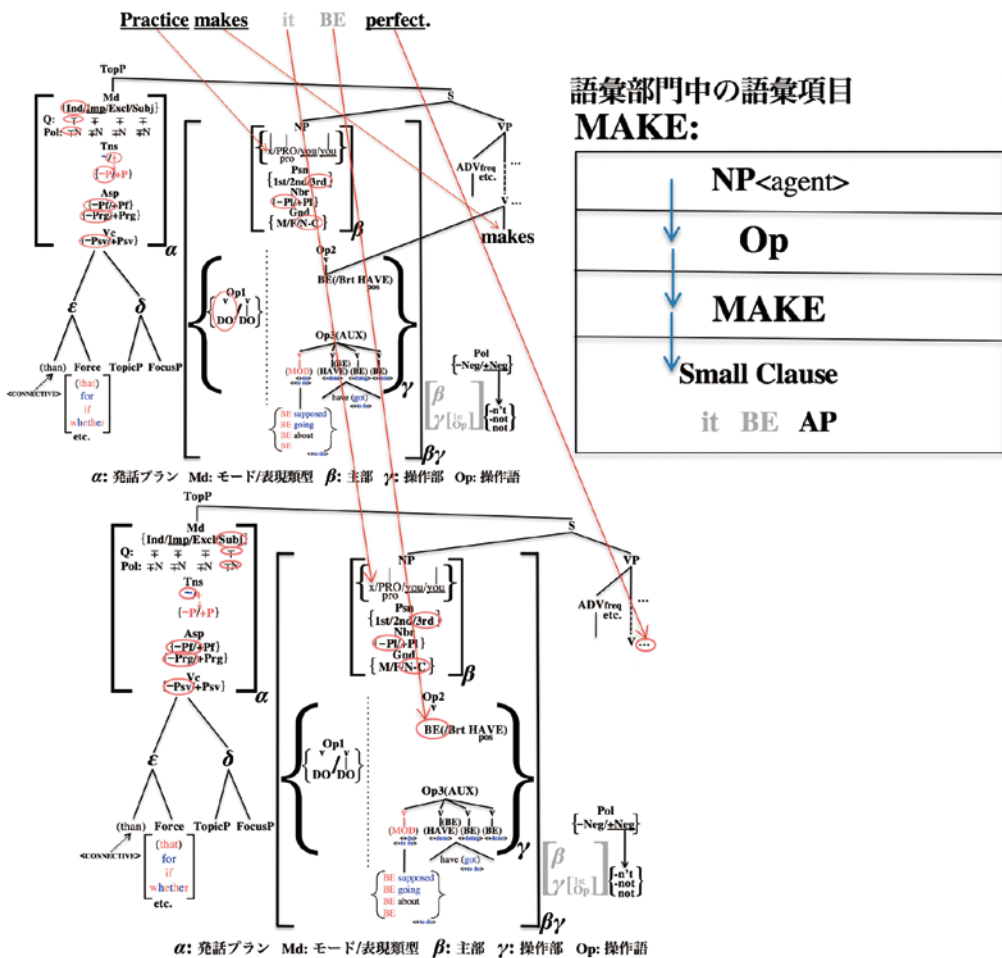
1.1 節では「文法」(cf. 註 (1)) の重要性について触れた。ここでは、文法にまつわる問題解決の基本方針を(小規模ながら)具体例を援用しつつ例示することにする。

結論から述べるなら、ここで採択する文法の枠組は「ひな形方式」である。採択の理由は、ひな形方式が共時態の理論として「書き換え規則・書き換え規約」に一切依拠しない、とする点で生成文法よりも多とされ、また「書き換え規則・書き換え規約」を中途半端に捨てる認知文法よりもやはり多とされるからである。(cf. 高橋 (2015).)

具体例として、ここでは (3) の例文の分析を採り上げよう。「Practice makes perfect.」は結論から言うなら、大きく 2 つの節で構成される。1 つは主節の「Practice makes...」、もう

1つは（一種の）小節の「it BE perfect」である。「it」も「BE」もここでは「意味的に想定されるだけで発音されない要素」と見做される（従って、連結線で結ばれていない）。「it」は(1')の下で述べた、大前提となっている「習うこと—則ちまずしっかりと考え、学ぶこと」を指す。小節の「it BE perfect」は言わば<状況のO>で「makes」の目的語である。

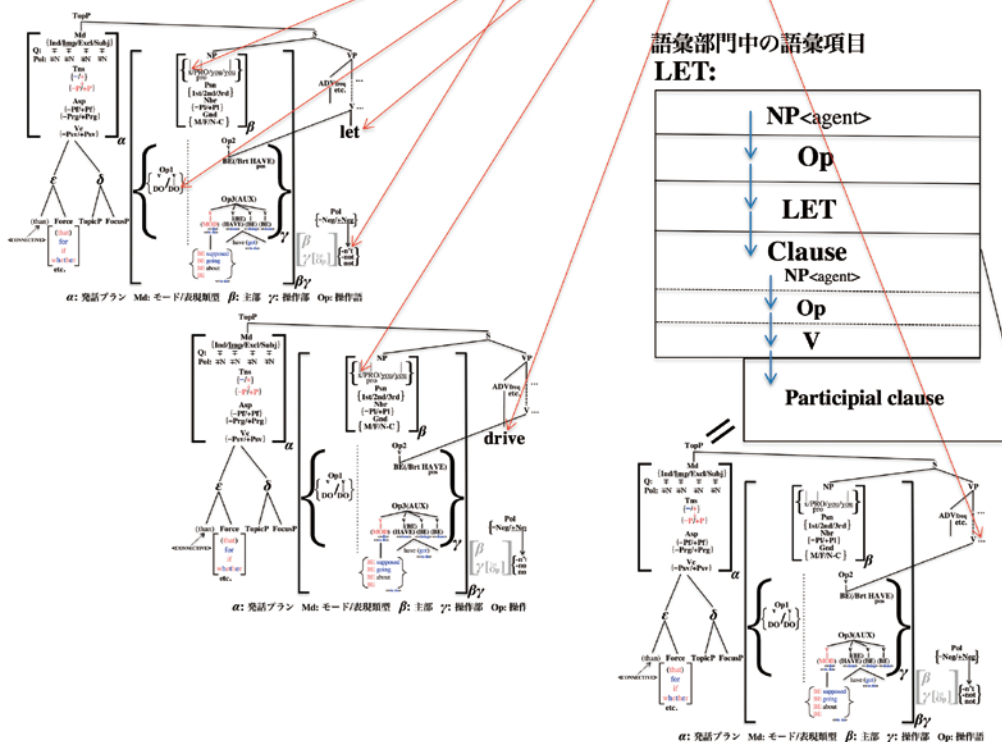
(3) Practice makes perfect.



もう一つ例を見よう。「Friends don't let friends drive drunk.」（本当の友達なら酔った友人に運転などさせない。）は、(4) では細部を簡略化した表記で示すが、「let」が「Clause (friends drive)」を取り、この「Clause (friends drive)」が「drunk」を従える分詞構文を形成している。

(4)

Friends don't let friends drive drunk.



2.2. テストはまず忘れよ

1.2 節では「テスト」の抱える問題点について触れた。ここでは、テストにまつわる問題解決の基本方針を（小規模ながら）具体例を援用しつつ例示することにする。

例えば、いわゆる読解の授業であると仮定しよう。通常読解の授業は、どの授業を見てもフォーマットが気持ち悪いほどに似通っている。つまり、タイトルで示されたあるトピックに関して、ある程度の長さのパスセージ全体がまず提示される。そのうちの一部には空欄があったり、下線が引かれていたり、整序問題がしつらえてあったりする。本文の横や下にはご丁寧に重要語句や背景知識にまつわる註が施されている。本文の直後には、空欄に対応する語句選択問題やら、下線部に対応する和訳問題ないし英文言い換えの選択問題やら、整序問題やらがしつらえてある。最後に本文の内容に関する正誤問題で締め括られる。繰り返すが、このフォーマットは、多少の変異はありつつもほぼ一定で、まるで申し合わせたかのように気色が悪いほどに類似している。巻の教本も入試問題も判で押したかのように足並みを揃えている。場合によっては、本文全体がパラグラフ単位の整序問題になっているものも

ある（そのうちの1パラグラフが本文のトピックにそぐわぬものとして、排除さるべく潜り込んでいたりする）。

ここで筆者の結論を述べるなら、以上の方式は基本的に全てダメである。まずそもそも、文字を最初から学生に提示してはいけない。たとえ読解の授業であってもである。学生には何も見せない。タイトルさえ見せてはいけない。外国語の場合見ると聞くとは大違いが常態であることを身を以てあらためて体験させる訳である。そのことを学生には最初から経験させなくてはならない。文字を見せないということは、（余計なお世話である）ご丁寧な註も見せないということである。文字を見せない以上、当然のことながら、語句選択問題も穴埋め問題も整序問題もない。さて、その上でここで採択する方式は次のような手順で進行する。まず、学生に白紙を渡し、文字を見せずにタイトルの音声だけを何度も何度も聞かせて書き取らせる。書き取ったらそれを自力で訳させ、紙に書かせる。その後全体に向かって「なんて聞こえた？ 誰でもいいから答えて」と促す。答えられない場合も少しずつヒントを与えながらなるべく自力での回答へと誘導する。当たったら褒める。間違っても基本的には叱らない。外国語で間違っただけ、別に何も悪いことをした訳ではないのだから。（おしゃべりや居眠りは当然叱る。小学生じゃないのだから。）最終的に黒板に書かれた正解のタイトルが学生の書いたものと違っている場合でも、自分の間違いを消しゴムで消してはいけない、間違っただけには朱を入れる形にしなさい、これは語学学習の鉄則だ、と教える。その後、タイトルの意味を問う。分からなければ辞書を調べてもよい、と促す。最終的に音声と綴りと意味が連合した段階で、今度はリピートさせつつ再度音声を何度も聞かせる。

本文も基本的には全く同様のフォーマットで進む。ただし、タイトルと違い、本文の場合には文構造やパラグラフ構造があるので、適宜解説を加えつつもやはりなるべく自力での解析を促す。訳も（直訳から入ってもいいが）最終的には妥協しない自然で座りのよい日本語を目指す。（これは、日英方向の訳の場合に威力を発揮することになる。）以上である。

この方式では、基本的に語句選択、穴埋め、整序の問題は存在しない。理由は1節で述べたことと今上で述べたこととから自然に帰結する筈である。

この方式は、実は学校以外でも自分でできる。やり方はまず友達とペアを組み、市販やネットの音声付き教材を各自が用意する。自分のものは相手には最初は見せない。自分の用意した教材に付属した音声素材をタイトルや文単位に切り取る編集作業をする。（やり方は、ネットで検索すればいくらでも出てくる。）最初は面倒に感ずるかもしれないが、編集過程で何度も何度も音声に接する結果、英語の音声自体に慣れてくる。さて、お互い自分の編集したものは見えるが、相手のものは見えない訳である。後はお分かりであろう。交互に教師役と生徒役をやればいいのである。そうすれば、結果的にお互いの教本をお互いがどちらも学ぶ

ことになるのだから、1冊分で2倍の勉強ができる。1粒で2度美味しい、という訳である。

この方式には、他にも余録がある。外国語を文字を見ないで書き取る場合、文字を見た場合には絶対に予測もできないような書き取りをする学生が出てくるという発見が何度もできる、という点である。具体例を示そう。「Stress and anger」という課の中に「Stress can kill, they say.」という文が出てくる。案の定、皆が間違える。正解は「ストレスが元で亡くなることさえある、と言われている」だが、「ストレスは解消できる (they sayは無視)」とほとんどが答える。これはまだいい方で、なんと「ケンの奴、殺してやる」と書いた学生がいた！「can」が「ケン」と聞こえたのであろう。この学生は「Stress」も「they say」も無視。もちろん文脈も無視。後はひたすら想像の翼を拡げたのであろう。(ケン君もとんだとばかりである。) こんな貴重な経験は「最初に文字を見せてしまう」生ぬるい授業では、教師も学生も決して味わえない類のものであろう。(なお、学生のレベルによっては「Stress can kill.」に関して「擬似自動詞」という文法概念を導入してもよからう。) また、「Fear」という課の中に「This chemical is called adrenalin.」という文が出てくる。正解は「この化学物質はアドレナリンと呼ばれる」だが、「This chemical」をなんと「このかな子は」と訳す学生がいたのである。(昔だったら「このケメコは」もいたかもしれない。)

これは友人に聞いた例だが、「My brother is afraid of snakes.」を何を血迷ったか「あいにく兄は蛇です」と訳した強者もいるらしい。どうやら「I'm afraid...= あいにく...」と機械的に覚えていたのが原因らしい、とのこと。しかし、これに大笑いしたとしても、「My brother is afraid of snakes.」と「I'm afraid...」にはなぜ共通に「afraid」という表現が使われているのだろう、と不思議に思ったことはないであろうか。この疑問は実は極めて興味深い問いかけなのであるが、いかがであろう。本当は読者諸氏にじっくりと考えて頂きたいところなのだが、解説をしてしまおう。英語で共に「afraid」という表現が使われているということは、何か共通項があるからに相違ない、とまず発想しなければならない。その共通項を一言で述べるなら「身も縮む思いだ」ということである。蛇を前にして「身も縮む思いをする」のも相手にとって思わしくないことを言わねばならぬときに思わず「身も縮む思いをする」のも、英語では共に「afraid」で表す、ということである。

駄目押しの最後にもう一発。やはり件の友人が、和文英訳テスト問題の指示文としてたまには英語を使ってみようと思ひ、「Put into English.」と書いたら、ある生徒が何を勘違いしたか、この指示文まで訳したらしい。まあ、別に訳して悪いわけではないのだが、その訳文が最高傑作だったとわざわざ電話をかけてよこしたのである。云く「[「PUT」はイギリスへ行った]だど。」(無論「英訳せよ」の意で、「put」の「目的語」が「問題文の和文」であり、言語化されていない。「put」は擬似自動詞。cf. Put the following into English.)

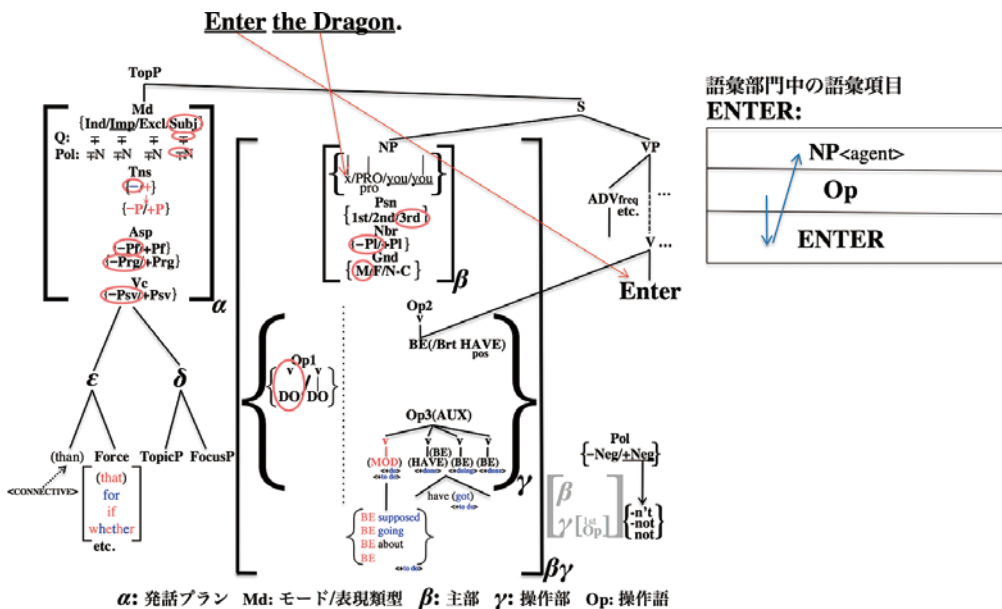
少々話が脱線したが、いずれにせよ、テストという概念に囚われるな、読解というありき
 たちのフォーマットに囚われるな、というのがここでのポイントとなる。その上で、音声と
 綴りと語彙と文構造と訳（と談話構造や語用論的知識）と辞書の引き方を総合的に身に付
 けさせる授業を目指せ、というのが趣旨である。

2.3. 日本語に訳して構わない

1.3 節では「和訳」の抱える問題点について触れた。ここでは、和訳にまつわる問題解決
 の基本方針を（小規模ながら）具体例を援用しつつ例示することにする。

1.3 節で触れた「Enter the Dragon」の意味を考えてみる。邦題は意識をして「燃えよドラ
 ゴン」となっているが、英語の元々の意味を考えてみよう。結論から言うなら、これは脚本
 のト書きで使われる用法で「(ここで) ドラゴン登場 (されたし)」の意である。もう少し専門
 的な点を付言するなら、ここでの「Enter」は命令法ではなく叙想法であり（従って3人
 称単数現在の「-(e)s」が付いていない）、またこのような語順を取るのには文末焦点の原則に
 則って焦点たる「the Dragon」を文末に持ってきたためである。以下のひな形方式に則った
 図式化を参照されたい。（因みに、ここでの「enter」も擬似自動詞。cf. 「enter the scene」.)

(5)



本論考の最後に、註(10)で述べた点を受ける形で、Facebookのある閉じたグループでのやり取りの中で筆者自身が書いた英文を幾つか付録として載せておくことにする。実に気楽な内容のエッセイである。お楽しみ頂ければと思う。

- (6) 茶道が趣味という人がグループにいたので、その人に向けてコメントした英文。(因みに「茶道」は流派により「ちゃどう」or「さどう」と読む。)

You know what? I have a hilarious episode about Chado.

A friend of mine, who was once holding an open-air ceremony (野点) on campus, invited an American teacher, who just happened to pass by. The friend told him that in 野点 it is customary that after tasting some confectionary, you are to say 「いとおかし」 in a dignified tone. Hearing that, we could hardly help burst into laughing but struggled to try suppressing a chuckle with effort. He took the friend's word at face value and after tasting, he really said slowly 「いとおかし」. We got then overtaken with big laughter!

- (7) Conversation between my wife and me in our car:

Wife: Look at that! Is it a cat or a dog?

Me: What!? Obviously it's a dog.

W: Are you sure? I guess it's a cat.

M: What are you talking about? It can't be a cat. Definitely it's a dog!

W: Positive? You think? Hmm... I wonder...

—— argument goes on for seconds ——

M: Wait a minute! (I notice there are actually TWO animals in the scene: one on either side of the road.)

M: You mean the one on the left side? (It's a very big 'dog-sized' cat 'on the leash'!)

W: Yeah! And you are referring to the one on the right? (It's a very small 'cat-sized' dog barking furiously at the cat on the other side.)

M: Yep!!!

—— We then cracked up at the unbelievable situation! ——

Lessons :

1. Look at things with an open, non-biased mind: there ARE in the world 'dog-sized' cats 'on the leash' and 'cat-sized' dogs that bark at a 'dog-sized' cat.

2. Carry on a discussion on the same assumptions.

3. 夫婦喧嘩は犬も食わない。

- (8) “If you could live in any foreign country for a few years, where would it be?” とのお題に対して:

If I could live in any foreign country (or rather place), I would live in/on Mars.

The main reason is that I myself come from Mars. Yes, I am a Martian, to tell you the truth. (Well it's a top-secret: shhhh! It's just between you and me.) Believe it or not, I was dispatched from there to this beautiful planet: I've been infiltrated into the earth to work as an espionage for the authorities of Mars. And time has come for me to return to debrief.

A second reason is that, as is often the case, I occasionally simply miss my homeplace.

A third reason is that against my own will, I have to put aside my attachment to the beloved residents of the planet in order to fulfill my 'inhuman' mission. (Alas, I seem to have finally come to cherish them: they've unconsciously almost turned me their side!)

For these reasons, if I had the chance to live anywhere, I would live in/on Mars (or rather go back home).

- (9) On Sunday I enjoyed listening, for the first time in a long time, to the pieces of music I would listen to forever in my youth: “All By Myself”, “Never Gonna Fall in Love Again”, “Change of Heart” by Eric Carmen, “If”, “Baby I'm-A Want You”, “Make It With You” by Bread, “Baker Street”, “Right Down the Line”, “The Ark” by Gerry Rafferty, “Just the Way You Are”, “My Life”, “Honesty” by Billy Joel... A bit maniac? :)

Oh, such good old days!!!..... Wait a minute, 'good old days' might be translated as 「古き良き時代」 in Japanese. Why is it the word orders are reversed in the two languages? Are there any factors governing this difference? Or is it by mere chance?... I don't know, but it could be an interesting topic to pursue. :) Similar examples include 'black and white' vs 「白黒」, 'right and left' vs 「左右」. However, 「白黒 (しろくろ)」 vs 「黒白 (こくびやく)」, 「左右 (さゆう)」 vs 「右左 (みぎひだり)」 even in Japanese, and 'right and left' vs 'left and right' even in English... How confusing! Help! (... Oh “Help!” by the Beatles is another 'must-listen-to' to me.)

参 考 文 献

- 阿部公彦(2017)『史上最悪の英語政策—ウソだらけの「4技能」看板』, ひつじ書房.
- 石橋結衣・千葉陽美・角掛菜月・早川夏実(2018)「言語理論検証の際の図式化の重要性」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- 猪浦道夫(2018)『TOEIC 亡国論』(集英社新書), 集英社.
- 藤田和也(2015)「英日の翻訳における誤訳・不適切訳の背後に潜む原理の探究」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- 國弘正雄(1999)『國弘流英語の話しかた』, たちばな出版.
- 佐藤怜美・小林維奈(2013)「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- 高橋直彦(1995)「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集(人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学, 107-178.
- (2001a)「「超特急」は快適だけど「超速—い」は不快(?)」, 『東北学院大学 AV センター紀要』第 6 号.
- (2001b)「「超特急」は快適だけど「超速—い」は不快(?)」. <http://raspberrries.jp/tab/tab_b0-3/tyoo/tyootokkyuu.html>
- (2011)「英語冠詞再訪」, 『東北学院大学教養学部論集』第 158 号, 東北学院大学, 15-39.
- (2015)「生成文法? 認知文法? それとも…?」, 『東北学院大学教養学部論集』第 172 号, 東北学院大学, 75-93.
- (2017)「かき混ぜ規則は不要である」, 『東北学院大学教養学部論集』第 176 号, 東北学院大学, 15-38.
- (2018)「現実味のある文法を目指して: 統語部門と語彙部門の関係を中心に」, 『東北学院大学教養学部論集』第 179 号, 東北学院大学, 49-82.